

## ホテイアオイ雑話

### 第2章 雑草害及び繁茂地の実態

沖 陽子

(岡山大学農業生物研究所)

ホテイアオイに関する文献を読むと、必ずといってよいほど諸言の中に、「本草は世界の十大害草のひとつ」という言葉を見つけることができる。では、害草であるからには、どのような雑草害を引き起こすのだろうかという疑問が湧いてくる。

以前、ホテイアオイのわが国での分布状況を調査した際、発生を認めた都道府県の約70%から実害ありとの報告を受けた。主な具体例として下記の事項があげられている。

1. 灌漑用水路、排水路等で水の流れを堰きとめる(30%)。
2. 漁業に影響を及ぼす(13.4%)。
3. 舟の運行に影響を及ぼす(13.4%)。
4. 汚臭、悪臭の根源となる(10%)。
5. 冬期に植物体の腐敗により水質汚濁を引き起こす(6.7%)。
6. 美観阻害(6.7%)。
7. その他<レンコン栽培地、材木置場等で支障を起す>(16.5%)。

これらの被害事項は世界でも共通の内容である。

次に、過去10年間における繁茂地の実態を紹介してみよう。まず、最大の繁茂地をもつ九州から話を進めよう。宮崎県の九電大淀川第二ダム40haの水面を草丈0.7~1mもあるホテイアオイが覆いつくし、同付近を漁場としている専漁者達の死活問題になったことがある。このようにダム貯水池や灌漑用に新しく造られた人造湖で本草が大繁茂する傾向は、アフリカなどの発展途上国にも多い。

また、熊本県江津湖では、70haの水面が本草により埋めつくされ、自衛隊による大掃討作戦が2週間展開されたことがある。その当時に掃討された現在量は約17500トン新鮮重と推定されている。

一方、筑後川下流域のクリークは、導水路、貯水池、排水路としての役目を持ち広大な面積となっているが、ここに本草がびっしりと埋まっている様子が見うけられる。ここでは、過繁茂の草種は本草以外に、キシウス

ズメノヒエ、キシウスズメノヒエ亜種、オオフサモなどがあがっている。いずれも帰化雑草である点に注目したい。

次に、本州で本草に多く接することができるのは岡山県であろう。主な繁殖水系は、児島湖流域の河川、用排水路、遊水池である。1960年以降に繁殖地域が広まり、1972、73年には児島湖一面を覆いつくし、漁船の航行を妨げるなど種々の問題を引き起こした。その後も、年次の変動はあるが、毎年大繁茂する為、多大の費用を投じて除去を行なっている。(しかし、1980、81年は、早春の徹底引き上げと冷夏及び厳冬から、ホテイアオイも影をひそめている)。

近畿地方においては、大阪府下で北は高槻市から南は泉南の用水池や水路でよく繁殖している。特に新興住宅地で下水道が完備されていない所に多く、毎年腐ったホテイアオイが水面に堆積し、その層が50cm以上に及んでいる。被害事項の4及び5に相当する公害雑草となっているわけである。約2haの池の除去作業に2ヶ月を要し、4トン車80台分除去したという報告もある。

また、裏日本では富山県で数年前からマスコミ等にとりあげられ、騒がれている。富山港に注ぐ運河には、輸入外材をイカダに組んで係留させているところが多く、樹皮が富栄養化を促進させ、また、浚渫をしない為、水深が浅くなり、本草の生育地として良い条件が重なっているらしい。このように貯木場が本草繁茂の好適地になっている例は結構多い。

以上のように、ホテイアオイは局地的に大繁茂し、除去に多大の労力と費用を投じさせているが、岡山県で成功したように、季節消長も考慮した的確な防除を施せば問題は生じなくなるであろう。また、本草は年次変動が非常に大きく、昨年大発生したので、今年も大発生するとは必ずしも、逆に、昨年一株もみかけなかった場で翌年は大発生する例もあることを付記したい。その理由は、越冬、夏期の気象条件および観賞用としての使用後の放棄など複雑な要因が絡んでいるものと思われる。

次章では、本草の防除法を紹介しようと思う。

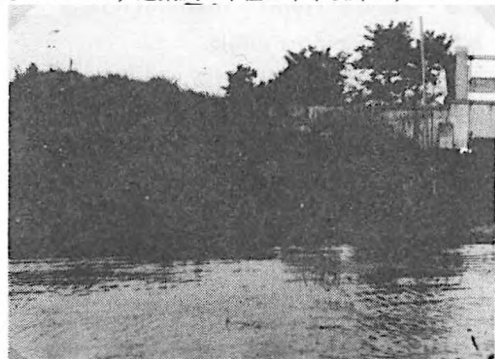


写真1. 岡山県の河川で繁茂するホテイアオイ

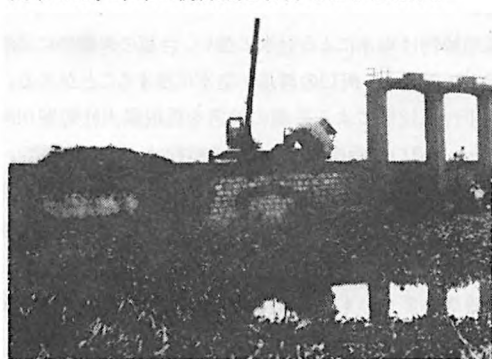


写真2. ホテイアオイの除去作業 (岡山県)